

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年三月一日発行(毎月一回一日発行)
第十七卷第十号(通卷第二〇三号)

鈴



あはれ

山口誓子先生追悼号

第 203 号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2011

飯
蛸

品川 鈴子

若潮の船溜りみな「明石丸」

眉も霜おく恋の句に遊びつつ

親知らず抜かるる構へ厚着して

マスクまで三枚重ね浜吟行



きさらぎの雨撥じく靴試し履き
角川邸芝に寒肥の升目穴
門に黄沙うつすら御成門
初雛笑まふ赤子に父蕩とろけ
飯蛸を輪切りにす吾ここ梗塞
登壇は見知らぬ若手春総会



玉

鈴

吟

香山 陶山 泰子

ままごと三三九度の紅葉寺
落葉かき雄淵・雌淵の畔にて
大岩に江戸ののみ跡紅葉谷
切り株に子猿のねぐら山眠る
紅葉狩杖立てかける道標

岡山 瀬口ゆみ子

学舎は銀杏落葉に埋もるやら
急勾配踏ん張り効かず散紅葉
首都圏を下界に猿山日向ぼこ
冬晴れの富士を遠望して称ふ
幼子はぜんまい仕掛け冬日向

兵庫 高橋 大三

選句・感想生姜湯を飲みながら
冬ぬくし足許ぬかるルミナリエ
大橋を歩けば強き摩耶風
短詩への意見書く間に年が明け
年越しそば食べにおいでと妻の声

大阪 竹下 昭子

小春日の忍者の町の散髪屋
冬茜関の小万の格子町
水鏡ライトアップの遅紅葉
日向ぼこ柑手欲しやと尾ふり犬
クリスマス包装紙まで金銀に

大阪 武田ともこ

冬晴るる昭和作りの上野城
伊賀焼の翁も聴くや冬の鴝
冬日浴ぶ俳聖殿の屋根まろし
枇杷の花翁立志の地はここぞ
枯芭蕉翁生家の庭に立つ

愛媛 武智 恭子

冬の鳩木影に入りて餌求む
団栗で独楽回し児等遊ぶ昼
甘酒を飲みて身体を温める
初雪に道行く人は足早に
一夜明け一つの柿が鳥の餌

大阪 谷 泰子

小六月老人ホームに義母尋ね
風邪声を使ひ惜しみて目で合図
宅配便受け取る石路の花明り
通院の舗道彩る散もみぢ
追はるるやうに過ごして年も早詰まる

兵庫 恒成久美子

紅葉狩列長々と京豆腐
御苑なる銀杏黄葉は天を突く
外国語とびかふ紅葉狩電車
ひとり剥く陸奥の林檎よ四半分
友よりの快気祝よ洋梨

大阪 角谷美恵子

ゴスペルを大地踏み締め聖歌隊
寒雷はモノクロ画像想ひ時
見え隠れ愛矯ぼくろ綿帽子
落葉し毛細血管のごと大樹
寄り添ひて山茶花ひらく二つ三つ

愛媛 年森 恭子

老翁に做ふ児童の注連作
紙一重なり着膨れとレイヤード
毛皮着てヒール五センチ高くせり
折り返す走者枯木の向側
来客のドアの開け閉め虎落笛

兵庫 内藤 三男

街道の今日も売切れ茸飯
羊羹の一切れ欲しき菊日和
秋風や休耕五年の田に仔てば
長き夜の灯のまたともる救護室
物忘れ笑ふ二人に秋深し

兵庫 中尾 廣美

ルミナリエ点灯を背に主婦帰る
お喋りのつきぬ間に過ぐ紅葉谷
夫ともに席譲らるる暖房車
渡り鳥休ませて森鎮もれる
朱を残し秋日落ちたり淡路島

大阪 中島 霞

水鳥の声をとほくに師の訃報
水に映えもみぢ古墳の裳裾めく
老いぬればなかなか減らず盛り蜜柑
メモを添へ送る自家製吊し柿
水差しの小さき鉄瓶賀状書く

兵庫 中島 節子

涸れ川に散歩の犬を放ちけり
ひよどりの群大雪の溪渡る
掻く雪の捨て場を託ちたる媼
芭蕉句碑肩まで雪に埋もれたり
目覚めれば無音の世界雪積みて

誓子追悼特集

「俳人ならこれだけは覚えておきたい名句」

— 山口誓子 —

品川鈴子

大正13

学のさびしさに堪へ炭をつぐ
「ホトトギス」で文学に馴染み、石川啄木の反伝統性に惹かれていた三高生の誓子だったが、学資を頼っていた京大行政法教授佐々木惣一先生の勧めと、育ててくれた祖父脇田嘉一の希望により、東大法学部に進学した。期待に応えねばならぬと、律儀な誓子は好きでもない法律の勉強にも優れた成績を修めるも、更に高文（高等文官の資格試験）を目指しての猛勉強で身体を壊し、休学せざるを得なくなる。法律の世界が文学青年にとつていかに索漠たるものだったか、「さびしさに堪へ」の表現に集約される。厳しい運命に翻弄された誓子は、子供の頃から「学問は孤独に堪えねばならない。幸福は自分の努力で掴まねばならない」という信条を生涯貫いた。（以下略）

匙なめて童たのしも夏水

昭和2

手火花に妹がかひなの照らさるる

昭和3

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

昭和12

麗しき春の七曜またはじまる

昭和16

大和また新たななる国田を鋤けば
大露頭緒くてそこは雪積まず
冬河に新聞全紙浸り浮く

修二会見る棧女人の眼女人の眼

美しき距離白鷺が蝶に見ゆ

サハリンに太くて薄き虹懸る

峯雲の贅肉ロダンなら削る

ピストルがプールの硬き面にひびき

つきぬけて天上の紺曼珠沙華

城を出て落花一片今もとぶ

海に出て木枯帰るところなし

炎天の遠き帆やわがころの帆

夕焼けて西の十萬億土透く

螢獲て少年の指みどりなり

除夜零時過ぎてこころの華やぐも

海に鴨発砲直前かも知れず

一湾の潮しづもるきりぎりす

虹の環を以て地上のものかこむ

瓜貫ふ太陽の熱さめざるを

天耕の峯に達して峯を越す

海水着脱げば出生以来の白

昭和29

昭和32

昭和33

昭和35

昭和36

平成5

昭和52

昭和11

昭和16

昭和19

昭和19

昭和20

昭和21

昭和22

昭和24

昭和24

昭和24

昭和25

昭和25

昭和37

昭和41

鈴の奏

品川鈴子選

終電の尾灯遠のく年の暮 香川 坊野貴代美

葬送の笙笛奏で散る紅葉

そこ冷えに筆のみだれる午前二時

凍雲に向ひ車輛の試運転

風紋の砂丘につるべ落しかな

木枯しや酒屋の蔵の仕込み唄

吹かれゆく櫛枯葉の軽さかな

舟板を貼りし土蔵や石露の花

ちり鍋を一人でつく味けなさ

五年ぶり冬服買ってほくそ笑む

墓石も銀杏紅葉の衣裳着る

公園の枯れ葉の山に児が潜る

児のピストル我を標的冬日向

大黒も茶席に忙し紅葉晴

菊日和池畔に殿のお召船

醤油の香漂う湯浅小春風

独り身の冬支度などすぐ終り

兵庫 山本 敏子

兵庫 有本 勝

三重 樋口 正輝

兵庫 大西 和子

話し声だけが聞えて冬の霧
自他共に甘えを許す枯芙蓉
新巻きは眺めるだけのものとなり
除夜の鐘厨のメモを剥がしをり
逝きし父の部屋古曆そのままに
朱雀門置き蕭条たる枯野
葉飲んだ？が合言葉年暮るる
九州を又も侵すか冬黄沙
戦友の訃報冬至の今朝も亦
老人館にも電飾の十二月
害獣になされ彷徨ふ母子猪
蜜柑島底幾丈の土壌かな
鳥居厳島神社の大鳥居まで歩く干潮冬日和
案内板鹿睡まじく日向ぼこ
多々羅橋袂に咲きし冬桜(しらばらやまぐら)
着ぶくれて夢に妣くる誕生日
野菊濃し村にひとつの地藏堂

兵庫 木野 裕美

香川 山口 博通

兵庫 大西ユリ子

兵庫 高木 篤子

浮寝鳥水平線に島浮かぶ

戸袋は網代編みなり枇杷の花
仏壇の殊に艶めく今朝の秋

大阪

井上あき子

小春日の玉砂利に和す雅楽の音
ひとりには余る大蕪引つ提げて

スポーツ店へいそいそ八十路の降誕祭

大阪

嘉悦 洋子

句を刻む伊予の青石秋深く
冬ざれて石鎚山と見定めず

秋の宿白熱討論夜更けまで

湯気立てる道後温泉人いきれ

冬帽子面差し変り児から子へ

兵庫

野沢 光代

突堤の釣人無視すゆりかもめ

良寛碑遊びに来ぬか山狸

義士祭息継ぎ井戸に投句函

占いに聞いてもとけぬ八ツ手の実

兵庫

池田 久恵

おしゃべりをみな聞く犬や日向ぼこ

ジャムの蓋力を入れる冬の朝

柿剥けば皮の流れの視線かな

枯葉踏む音が遠のく獣道

愛媛

沖則 文

暮早し退社時刻の赤提燈

石鎚の樹間を過ぐる落葉風

短日や燈火が少ない下校道

大楠の根方明るし石路の花

兵庫

四葉 允子

七五三髪結い仕草大人ぶる

城内の藩邸跡は草枯るる

冬枯の急使かけ込む塩屋門

紅葉めで肩までひたる湯の香り

鹿児島

原田 圭子

厳冬を告げ万両の鮮やかに

サーカスのショーにみとれて冬日暮れ

外に出れば箒持つ癖庭小春

愛媛

城下 明美

聖歌劇台詞を忘れべそかく児

夢までも吾を急かせる年の暮

“ゴウゴウ”と寒さ募らす窯の音

紅葉中兄妹の句碑見え隠れ

羽生きよみ

南瓜を割る力減り老兆す

年用意冷凍ものを使い切り

新暦妣の法事の曜日見る

島みかん試食にもらい皆笑顔

濱田ヒチエ

小麦播く畝整いし讃岐の田

冬の宿四百年の松仰ぐ

倉敷の水路に映える萩紅葉

遊ぶ事ばかり浮んで年の内

香川

田中真由美

秀
鈴
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 佐方 明遊 〃

*選句は全て 品川鈴子

凍雲に向ひ車輛の試運転

坊野貴代美

車輛や乗り物などがやつと完成した折には、一般の使用前に運転状態などを試しに動かして安全を確かめる。お日柄のよい日を選んで慎重に験しながら運転手は視線を真っ直ぐ前方へ定めると、どんよりした凍雲へ向かつて走り出す。目出度い出発でも、不安がふとよぎる。それこそ交通に携わる者に課せられている緊張感である。

舟板を貼りし土蔵や石路の花

有本 勝

湊町の裏通りには、土蔵の漆喰に御用済みになった舟板が貼り付けてあるのが見られる。その基礎石の犬走の辺には根締めのように鮮やかな石路の花が群れ咲いて風情を添えている。かつては海運や漁業などで栄えた暮らし向きが偲ばれる。

五年ぶり冬服買ってほくそ笑む

樋口 正輝

最愛の妻を失ってからは服を買う気もしなかったが、ようやく五年ぶりに冬服を新調しようと、一人で慣れない買い物をして選んだ服は、暖かくて鏡を眺めるとなかなか似合っている。これなら亡き妻も褒めてくれるに違いないと、つい一人でひそかに笑みがこぼれた。

大黒も茶席に忙し紅葉晴

大西 和子

お寺の庭で開かれた茶会に作者も参加された。晴天で紅葉も美しい中、茶会は盛況でお茶の関係者は忙しい。良く見ると、住職の奥様（大黒）まで借り出され、まめまめしく動いておられる。作者は大変だなあと思いつつ、茶会を楽しみ気持の良い一日を過ごされた。

話し声だけが聞えて冬の霧

山本 敏子

冬の霧は深く重い。川、湖、池の周辺では、冬の晴天で放射冷却の朝、濃い霧が発生し二〇メートル先の人が見えないこともある。作者が何か用事で外へ出たとき、人の気

配が感じられないのに話し声だけが聞えた。冬の霧の様子を的確に表現された。

除夜の鐘厨のメモを剥がしをり

木野 裕美

年用意はいくつになっても手間の掛かるもの。作者は長年の経験からやるべきことをメモに書き、厨に貼っておられる。大晦日まで掛かったがやつと終わり、年越しそばを食べている時除夜の鐘が聞こえてきた。メモの内容をなし終え、ほっとしながらメモを剥がし、清清しい気持ちで新年を迎えられた。

老人館にも電飾の十二月

山口 博通

近年クリスマスには都市の大通りだけでなく、家庭でも電飾するのが増えており、LED照明が安価になり拍車が掛かっている。十二月に入り、今まで縁がないと思っていた作者の近隣の老人館にまで電飾された。「おや、まあ」と微笑しながら「なかなか良いものだ」と眺めている作者。

鳥居まで歩く干潮冬日和

大西ユリ子

厳島は安芸の宮島と呼ばれ日本三景の一つ。厳島神社の大鳥居（高さ十六メートル、重要文化財）は春日大社、気比神宮（福井県）と並び日本三大鳥居の一つとされる。平清盛の時に造営された初代から数えて現在のものは八代目。大鳥居は普段海中にあるが、干潮時には陸から歩いていける。作者が訪れた日は冬晴れで、丁度干潮時に当たった。幸運に喜びながら歩いて鳥居まで行き参拝された。

戸袋は網代編みなり枇杷の花

高木 篤子

網代編みは竹や葦などを薄く削り斜めまたは縦横に編んだもの。戸袋が網代編みなのだ。庭の隅に咲いている枇杷の花の芳香が網代編み越しに流れて来る。作者はそれを楽しんでおられる。作者の手柄が感じられる一句。（以下略）